

親愛なる皆様

演劇をしたいという神様の願いから 演劇が生まれたのかもしれないと私は考えています。宇宙という何もない舞台に、神様が大地と空、鳥と魚、そして何百万人もの優れた演出家や俳優を生んだのでしょう。私たちが生きているから演劇ができる一方、演劇によって生きる理由を見出していると信じています。

どのパフォーマンスも、見る人の心に生きる理由を呼び起こすものです。舞台は、私たちの人間性を生み出してくれる子宮です。そこには、人類のすべての秘密、すべての思考、すべての祈りと希望が詰まっています。

他の芸術作品と同様に、特に演劇は、時間や空間を超えて、自分の知らない数多くの世界を見せてくれます。演劇は舞台が終わったとしても、人々の心の中で永遠に生き続け、その人の人生の一部になると確信しています。舞台の上では日常のルールから解放されます。地を天とし、天を地とするような不思議なことが許されるのです。演劇はその非日常を味わうことができ、さらにその体験についてじっくりと語り合うことができます。

私たちは今、デジタル革命によって均質化が進む世界に生きています。このようなフラットな世界であるからこそ、劇場は、人種や宗教に関係なく、リアルタイムで、人間性を共に発見し、体験できる、ほとんど唯一の場所なのです。演劇は、私たちが生きていくことの自覚を与えてくれるだけでなく、なぜ生きているのか、どうすれば一緒に生きていけるのか、という貴重な知識を与えてくれます。

演劇とは何か、演劇の機能とは何かという質問に答える必要性が、より高まっているような気がしてならないのです。数年前までは100年に一度の割合で答えが出ていたのが、今ではほぼ10年ごとに答えを探さなければならなくなりました。そして、私たち自身だけでなく、私たちが暮らす社会にとっても、演劇を再定義する重要性が高まっています。言い方を変えれば、なぜ演劇が社会にとって救いになるのかという質問が最も重要になります。演劇の神殿である劇場は、人類がそのつながりと全体性を経験する場所です。スペクタクルは、私たちの壊れた人間性、つまりボロボロの服を修繕するための針です。人類のまともな未来が どこかで発明されるとしたら、それは劇場の中に違いありません。ブルガリアの優れた詩人、ゲオ・ミレフ氏は、「詩人や哲学者が書いたことはすべて実現する！」と予言しています。私もその一人になりたいのです。

最後に、友人から聞いた話を紹介させてください。

日本では、1945年、アメリカの占領軍が危険な武器として、すべての日本刀を当局に引き渡し、溶かすようにとの命令が下されました。その中には、先祖の記憶、武士の名誉、ユニークな美術的傑作など、貴重なものが含まれていました。しかし、日本側の必死の努力により、救わなければならない精神の祠に例えられた刀は「貴重な美術品」と

して認められました。こうして彼らは、日本の貴重な精神的財産の一部を守ることに成功しました。

演劇というのは、私たちが守らなければならない日本刀なのです。その刃が記憶の欠如、感情の欠如、思いやりの欠如から私たちを守るように、私たちもつまらない妥協から演劇を守らなければなりません。簡単に廃棄する、忘れられるものとしてではなく、美しい作品として、私たちはそれを引き継ぎ、後輩たちに伝えていかなければなりません。私たちの視野を狭め、言葉を濁し、目を伏せさせるような全てのものには、燃える剣のように芸術を突きつけましょう。

この燃えるような刀で、私たちの頭と心を誇り高く掲げましょう！

演劇万歳！